

幼児教育に携わる人のための0歳期の言語生活の発達 —野地潤家博士の『幼児期の言語生活の実態』Iを手がかりにして—(その2)

前田 眞 澄

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2019年11月1日受付、2019年12月20日受理)

要 旨

引き続き野地潤家著『幼児期の言語生活の実態』I (昭和52 (1977) 年、文化評論出版) を取り上げて、0歳10か月から12か月目までの一乳幼児の言語生活の発達とその指標となるものを明らかにしようとしたものである。

はじめに—本研究の目的・方法、資料—

野地潤家博士の『幼児期の言語生活の実態』I (昭和48 (1973) 年、文化評論出版) を取り上げ、0歳期10か月—12か月の言語生活の発達を帰納的に明らかにし、その目安となる指標を見出すことが目的である。方法としては、『九州女子大学紀要』第55巻第2号では、誕生から10か月までを取り上げて、対象となる乳幼児の泣く、聞く、見る、体を動かす、声を出すなどの行為がどのように結びついて言語生活が進んでいくのかに着目して、その発達の筋道を見抜いていくようにした。今回はその後どのような進展を見せるのかを、体を動かす (なかんずく遊ぶ)、聞く・見る行為、一語文の登場・続出、発音練習の活発化を手がかりにたどっていくこととする。なお、『幼児期の言語生活の実態』I—IVの「あとがき」には当時までの先行研究が踏まえられ、いくつかの観点からの気づきは記されている。しかし、総体としての言語生活の発達はまとめられていない。したがって、以下の考察は、執筆者自身の気づき・考察であるが、先行研究として何を踏まえ、どの問題に絞って言語発達を見極めるかも焦点化されていない。今は、幼児期の実際に直面して、そこから引き出せることを明らかにしようとするばかりである。研究としては初歩的で、どこまで妥当性と独自性があるか、執筆者自身がわかっていないものであるが、読んでいただき、原典と照らし合わせて助言を頂ければと願っている。なお、引用ページは見やすいように本文中に入れることとする。

一 欲求がことばを伴い始める (十か月目)

①人と関わって遊ぶこともひとり遊びすることも増えてくる…人と関わって笑ったり、おもしろがったり、喜んだりすることが次々に出てくる。

(ア) 昭和23 (1948) 年12月10日…「かわいいくしゃみをする。父が両手を鼻の下へもって行って、くしゃみをするまねをしてみせると、そりくりかえってわらう。十数回くりかえしても、最高度の笑いをつけてやまない。」(I、p47)

(イ) 同年同日…「抱いている時、父・母がおどるようにしてやると、たいへんよろこぶ。」

(ウ) 同年同日…「かくれんぼのおもしろさも、おぼえてくる。父にだかされている時、うしろから母をつつくようなまねをすると、たいへんよろこぶ。二回目・三回目には、母をうしろからつつかぬさきに、大きな声でわらう。」

(考察) (ア) は、父親がわざわざ自分のくしゃみをまねるのがおかしかったのであろうが、二度目のまね、三度目のまねとなると、父親がさらにそのくしゃみを続けるのがおかしくて笑っているようである。(イ) は、抱っこしている自己の手足を動かして踊りを踊るような格好にしてくれたのが嬉しく、とても喜んだのであろう。(ウ) は、父親に抱かれていながら母に近づき、後ろから母をつつくまねをして、どこからしたのかと母をきよろきよろさせるように仕向けたみたいである。そうすると、ずいぶん喜び、二回目以降は母に近づいたところで、すでにその後をすることを予測して大きな声を出して笑ってしまったというのであろう。これらは、声を出す代わりに大笑いをしたり、喜んだりしているのであろう。

他方で、ひとり遊びも、熱心にするようになる。

(エ) 昭和23〈1948〉年12月10日…「窓際で、おもちゃをもってあそんでいる時、ひとしきりあそんでしまえば、つぎには、そのおもちゃを、窓からおとして、よろこぶ。」(I, p48)

(オ) 同年同日…「昼寝をして、目がさめた時、しばらくは、泣きもせず、ものも言わず、わらいもせず、だまっている。そして、ひとりでせつせとあそんでいる。」

(カ) 昭和23〈1948〉年12月13日…「おもちゃを口にふくみ、自分で、「ポン」のように音をたてて、興じている。そして、おかしくてしかたがないように、わらいこける。すこしずつ自発的に動き、行ない、わらいなど、していくようになってくる。」(I, p48-49)

(キ) 同年同日…「パンを左手で一つとり、それを右手ににぎりかえ、もう一つとり、右手に二個をにぎる。三個からは、持ちきれないで、おちていく。それでも、かまわずに、左手でとっては、右手にもっていく。」(I, p49)

(考察) 遊ぶ行為は、9か月目に「かなり、さかんに、いろいろのことを言ってあそんでいる。」(昭和23〈1948〉年11月9日)、「夕食後、よくあそぶ。」(昭和23〈1948〉年11月20日)のように、前月にやっと現れてきた営みである。遊ぶという記述はないが、少し後の「蜜柑箱の中に入れてあるかんなくずを、窓の敷居の上につつしては、よろこんでいる。無心に一心にしている。だまって、しきりにうつし、あたりをかんなくずでいっぱいしている。」(昭和23〈1948〉年12月5日)も、典型的なひとり遊びであろう。十か月目になると、(エ)・(オ)にあるごとく、遊びをいっそう集中させたり、おもちゃを窓から落として喜んだりするなど変化させたりしているようである。一方、(カ)のように、おもちゃを口に含んで音を立てて出し、笑いこけたり、(キ)のように、左右の手で次々に持ち替えて作業化して遊んだりすることも、し始めている。後者の作業は、持つパンの個数が多くなると落ちていくため、右手近くにパンがあるだけしか続けられない。なくなると、落としたパンを拾うか、何かして復活させるか、また別のおもしろい作業を見つけるかするのであろう。あるいは、飽いて、どこかへ行くのかもしれない。

②しかし、ふと呼びかけなくなったり、何かを見つけて周りの人に頼む必要があったりした時、声が出てくる。以下は、記載された順に記しておく。

(ア) 昭和23〈1949〉年12月10日…「母におんぶされていても、ひとりであそんでいても、ふと、他の人を呼びかける。『バー。』のように言ったり、『オー オー。』のように言ったりして、相手(よその人)に訴えようとする。[ba]の[b]の発音は、たどたどしい唇の動きがはっきりとききとれるような言いかたである。」(I, p47)

(イ) 同年同日…「ひとりであそんでいる時も、ときどき、父なり母なりに呼びかけ、見まらせておいては、自分でたのしそうにかっぱつにあそぶ。」(どう呼びかけたかは、ことばには表せなかったようで、「……。」にしている。)

(ウ) 同年同日…「とにかく、なんでも見るもの、あるものが手にとりたいし、口へもっていきたいらしい。停電の時、ろうそくを見ると、「オーン オーン。」(→母)のように言って、ほしがる。そして、ろうそくの焔をにぎろうとする。やらないと、いたいたいほどに泣くのである。ろうそくをそっとかくすまでは、泣きじゃくってやめない。」

(エ) 同年同日…「机の隅においてある菊の花をほしがって、「ヴァ。」のように父に言う。一輪、あたえると、それをちぎりつつ、口にもっていこうとする。」

(オ) 同年同日…「(②の(ア)に続いて)おとしておいては、それをひろってくれと、『ウーン ウーン。』(→母)のように言って、訴える。父の万年筆も、おとしてしまう。」[同じ日に、母がアイロンを使っている時にも、そのアイロンをほしがって、『ウーン ウーン。』と言う。また、よそのうちで、火鉢の上にやかんのかかっているのを見ると、それがほしくなり、『ウーン ウーン。』(→母)のようにいう。](I, p48)

(考察) (ア)も(イ)も、遊びに集中していても、誰かに呼びかけたり、父・母に呼びかけて見守らせたりしている。それに対して、(ウ)・(エ)・(オ)は、見つけたものが珍しかったり自分が落としたものであったりして、ほしくなって、さまざまな言い方をしている。人に呼びかけて、取ってもらおうとして、おりおりに言えることばを発している。

③また、聞いたり、見たりすることにも成長がうかがえ、そこから音や声、行動が伴うことも多くなる。時

間的に順序を追って掲げると、次のようになる。

(ア) 昭和23〈1948〉年12月15日…「音響や音声にずいぶん敏感になっている。物音にはっとする。そして、その方向なり、音源なりを凝視する。じつにすばやく、耳をはたらかせる。」(I, p49)

(イ) 同年同日…「父が歌をうたっていると、自分でもながく声をのぼして、しきりに歌めいてかたりはじめる。」

(ウ) 同年同日…「父がせきばらいをしてみせると、すぐにまねて、『エヘン。』の文のように言う。『エヘン。』と、はっきりと言うことは、まだできない。」

(エ) 同年同日…「停電のため、ろうそくをつけると、それを見て、『ア。』のようにおどろきの声をあげる。」

(オ) 昭和23〈1948〉年12月18日…「夜、帰宅した父を、澄晴、にこにこ顔で、ねまきのまま、迎える。」

(カ) 昭和24〈1949〉年1月1日…「大洲の祖母のうち。父が『スミハレチャン コンニチ ワ。』の文のように頭をさげてみせると、澄晴も、ぺこんと頭をさげる。」(I, p50-51)

(考察) (ア) は、(イ) - (ウ) の総括ともいえるまとめである。聞くということが意識されている姿を集約的に表しているのであろう。具体的には、(イ) のように、父の歌を聞いて同じように声をのぼして歌めいて語ったり、(ウ) のように、父のせきばらいをすぐにまねて「エヘン。」のように言おうとしたりするわけである。(エ) は、停電のため、暗い中でろうそくがつけられたため、その鮮やかさに「ア。」という驚きの声があがったのであろう。むしろ見ることの新鮮さが伝わってくる。(オ) は、夜父が帰ってきたのが玄関の戸をガラガラと開ける音や「ただいま。」と言う声でわかり、にこにこ顔で出迎えて、目でも確認しているのであろう。(カ) は父が挨拶をして見せたため、まだ言葉を返すことはできないが、頭を下げる動作だけはきちんとやりおせたのであろう。これも、父のしぐさを見て、挨拶の言葉と頭を下げる動作とが連動していることを了解していなければできないことである。振り返ってみれば、確かに言葉や音への敏感さは際立っているが、見ることも自ずと伴っていることが知られよう。

④他方、二か月目、七か月目、八か月目、九か月目に続いて、ひとりで発音練習のように、練習してみたり、動作を伴って声をはりあげたりすることも、次のように試みられる。

(ア) 昭和23〈1948〉年12月10日…「○ワーワ ワー。オ オ。ア バウ ウ。アー アー ブー ブー。アー ブー。アーブー。ウー。(→己)

片手をふりあげて、また時には、両手をふりあげて、ひとりで大きな声をはりあげ、演説でもしているかのような身ぶりをし、つづけさまに言う。両親は、そのさまを、『わがやの大統領』と名づけたりした。トルーマン大統領が再選されたころであったため。」(I, p47-48)

(イ) 昭和24 (1949) 年1月6日…「○マン マン マン マン。(→己)

平井の祖母のうち。なかば律動的に、このように言う。」(I, p51)

(考察) (ア) の方が特殊形に見えるが、両親が「わがやの大統領」と名づけるぐらいであるから、記録では一度しか出てこないが、このように大きな声で、手をあげてつづけさまに言うことが何度かあったのであろう。そうだとすると、文に至る前のどの音をどんなふうに出すか定まらない時、からだじゅうの力を発揮して、どういう口の形にすればどういう声が出るか試しているところかもしれない。順に、ワ・オ・ア・バウ(二度目からはブー)・オのア列とオ列という発音しやすい二列から5つの音が選ばれ、長音化されることが多いが、短い時もある。単音ときめているわけでもないようで、「バウ」という二音が入ることもあったということであろう。そうみると、(イ) は、口頭練習でどの音を練習するかが定まった形で、安心して楽しく発音練習をしていることになる。

二 初語が登場し、見聞きしてまねたり、指で指したりする(11か月目)

①「動作、日に日にすばやくなる」(昭和24〈1949〉年1月26日)に典型的に現れているように、この前後、以下に挙げるように、行動の記述が多い。

(ア) 昭和24〈1949〉年2月1日…「朝はやく目ざめて、ねむっている父のほおを、人さしゆびでおしたりする。ぼつぼついたずらをおぼえてきている。」(I, p54)

(イ) 昭和24〈1949〉年2月2日…「夕食後、母の乳房にいこうとしながら、急にふりかえって、父のあごを、

右手でおさえるようにして、急いで、母のほうへすがりついていく。二三回くりかえして、このようないたずらをする。父のあごをつつくようにするたびに、大きいこえをはりあげる。

(ウ) 同年同日…「ひとり立ちがだいぶんじょうずになった。ながく立ってられるようになったが、しりもちをつく。」

(エ) 昭和24〈1949〉年2月3日…「一日中、雨なので、屋内にいて、いたずらをする。窓からおむつをひっぱったり、ものさしでつついてみたりする。」

(オ) 昭和24〈1949〉年2月4日…「朝、六時すぎに目をさまし、ねまきのまま、父をつつきにいく。また、頭をふとんにつけるように横になって、父に「バー。」をする。」(I, p55)

(カ) 同年同日…「昼前、母が七輪に火を入れている時、あわただしくやってきて、お釜の中のしゃもじをとりだし、それについているご飯を食べる。しゃもじをもって、板間をたんたんとたたいたり、みずやをたたいたりする。」

(キ) 同年同日…「風鈴のゆれる影を見つけ、手でその影にさわりにいく。」

(ク) 同年同日…「ふとんをしこうとして、母が押入れの戸をあけると、すぐやってきて、押入れの中から、下着類をかたっぱしからとり出し、母のハンドバックの中のものを取り出し、ハンドバックをもって、しばらくあそぶ。」(I, p56)

(ケ) 昭和24〈1949〉年2月5日…「午後、お隣の竹原のおばさんとともに、母におんぶして、映画(「女の一生」)にいく。館内では、はじめびっくりしてあたりを見まわし、正面の画面をふしぎそうに見ていた。しばらくすると、母の背中で、足をつっぱる。みかんを一つ一つ、つぎに、あられを一つ一つ、母がわたしてやる。それをカリカリと小さな音をたててたべる。いかげんたべると、大きい声で、『アー アー アー』と言っていたが、やがて寝入ってしまった。」

(コ) 昭和24〈1949〉年2月6日…「朝食の時、おかゆを入れてやるのがおくれると、おこって、くるつと背を向けてしまう。また、父が新聞を見ていると、父の後ろへまわり、のぞきこむ。口の中に大きなおもいを入れていたので、声をだすことはできない。何回ものぞきこんで、よろこぶ。」(I, p57)

(サ) 同年同日…「大洲の祖母から、お餅を送ってもらう。その荷物のひもをとく間、ひもをひっぱったり、ふったりして、お手伝いをする。あけると、箱のふたにお餅を一つ一つ入れ、二十くらい入れると、つぎには、かごの中へ、一つ一つ入れる。なかなか忙しい。」

(シ) 同年同日…「あべかわ餅をしてもらい、たくさんたべて、手をふりながら、なにかを語って言う。」(考察) この活発さを一段と進めているのが、(ウ)にあるように、ひとり立ちできるようになりつつあることであろう。そのことが自信にもなり、体力的裏付けともなる。(ア)・(オ)のように父とかかわり、(カ)・(ク)のように母の行動に伴って新たにすべきことを見つけている。(サ)のように家に餅が届いたり、(シ)のように母にあべかわ餅を作ってもらったりするのも、似たようなおもしろい場と受けとめていたであろう。(イ)は、父と母両方にかかわり、楽しい一瞬を生みだしたものである。このような人との結びつきは、(エ)の「窓から(ほしてある)おむつをひっぱったり、ものさしでつついてみたりする」のように物にも向けられる。(キ)のように「風船の揺れる影を見つけ、手でその影にさわりにいく。」こともあるほどである。これらのうち、(エ)・(キ)は人との結びつきではなく、物との関わり合いであるから、10か月で掲げたひとり遊びの発展とも見られる。

②その中で、一語文と見られる単語が出てくる。

(ア) 昭和24〈1949〉年1月15日…「母におんぶしてもらっているとき、みかんをひときれずつもらってたべる。みかんがなくなると、背中から『マ。』の文のように母に言って、ほしがる。また『マンマ。』の文のように母に言って、ほしがる。みかんがほしいと訴えているのである。」(I, p52)

(考察) この事例が一語文とみられるのは、(1)場面の展開上ここで何かを言う必要があるとすれば、みかんという単語しか考えられないが、その語は覚えていないため、声を発して周りの人にそれだと気づいてもらうほかなく、一旦「マ。」と試してみたのであるが、(2)まだわかってもらえないため、もう一度言い直して「マンマ。」と単語らしく音を重ねて長めに言ったのである。(3)しかも、これが文であるという証は、この語に「マンマ(みかん)をください。」という訴えが感じられることである。なお、著者(野地潤家氏)も私も「マンマ。」

をみかんと解したのであるが、これがおかあさんの意味だとしても、趣旨は同じになる。

この後、声で催促したり、指差したりして、自分の思うように周りの人を動かそうという場面が、以下のように続出する。

(イ) 昭和24〈1949〉年1月17日…「母にだかれていて、父にだかれたがり、だかれると、よそにいくようにさいそくして、『ア。』の文のように言ったり、『アッ。』の文のように言ったり、『アン。』の文のように言ったりする。この二三日来、このように、母から他の人にだかれたがり、このように言う。」(I、p52)

(ウ) 昭和24〈1949〉年1月24日…「母に抱かれながら、食卓の上に並べられたもののうち、自分のほしいものをさして、『ア ア。』と言う。」(I、p53)

(エ) 昭和24〈1949〉年1月31日…「人さし指でものをさしながら、『ア ア ア。』と言って、さかんにものをほしがる。あらゆる好奇心と欲求とを、この一語にこめる。それがみたされないと、はげしく泣く。」

(オ) 同年同日…「母にだかれて、おさかなを買いに出ている時、お隣の浜本のおばさんを見かけると、どうしてもおばさんに抱かれたがり、だいてもらおうと、おばさんのうちのほうを右手の人さしゆびでさし、それから、道路のほうへつれてゆけとゆびさし、母がそばにいても、だかれようとしなない。しばらくすると、『ウン ウン。』の文のようにおばさんに言って、お隣のおじさんに抱かれようとする。おじさんにだいてもらおうと、にわとり小屋のほうへつれていけと、そのほうをゆびさした。しばらくすると、『ウン ウン。』の文のようにおじさんに言って、お隣の下郷のおばさんに抱かれたがる。おばさんはだっこして、母に向かって、『マー コワイホド チエガ ツイテ ジャ ヨ。』の文のように言う。」(I、p53-54)

(カ) 昭和24〈1949〉年2月3日…「水道端やお隣の竹原さんのやねにくるすずめを見て、ゆびさしてよろこぶ。」(I、p54)

(キ) 昭和24〈1949〉年2月5日…「目がさめると、あたりを見まわし、寝ている父のほうを向いて、わらいながら、『パー。』の文のように言う。」(I、p56)

(ク) 昭和24〈1949〉年2月8日…「食事の時、あれこれと、ゆびさして、好きなものを食べるようになる。大豆とこぶの煮たのをほしがり、大豆を一粒ずつ、父に口に入れてもらい、おいしそうに食べる。」(I、p58)

(考察) (ア) で一度声を出して言うことを聞いてもらえた経験があるため、今度はどう言うかが課題となる。まだ、どういうことをどんなふうにするかは決まっていなくて、まずはいちばん声を出しやすい「ア」を中心に、(イ) は三種の言い方を試しているようである。(ウ) からは、自然に指差す行動と結びついて、声も「ア」を重ねて言うようになってきている。(エ)・(オ) では、指差しと声との連動がなだらかになってきている。「ア」も二回言うよりは三回言った方がほしがっていることがわかってもらえると、か、「ア ア ア。」と言ひ、聞かれないと不満足であることを激しく泣いて示している。「ウン ウン。」は、二度とも一連の動作が済んでしばらくたって次の動作を始める時、発せられており、澄晴さんなりに使い分けられているようである。(オ) でお隣の下郷のおばさんが「マー コワイホド チエガ ツイテ ジャ ヨ。」と評したのも、指差し行動が軌道に乗り、ことばを出すときと指差し行動とがうまく繋がっているとみなされたからであろう。なお、(カ)・(ク) の「屋根にくるすずめを見て、ゆびさしてよろこぶ」・「ゆびさして、好きなものを食べるようになる」は、指差し行動が独立して用いられた事例である。指でさす行動をすれば、話をしなくてもわかれば、わざわざ言葉を発するわずらわしさを省くのは、幼児にとって当然のことである。それゆえ、言葉を発するのをやめたのは、言葉と指差しが同じような役割を果たしていると感じた証なのである。この系列は、前項①と同じく人と関わって声を発するものになる。(キ) は、生後10か月でも、よその人に話しかけていたことばである。ここでは、余裕をもって話しかけている。

③聞く・見る活動のうち、この11か月までの時期に特徴的なのは、前月④の(イ)・(ウ)・(カ)に出始めた見てまねて行動したり、聞いてことばでまねて言ったり言い方を少し変えたりすることである。その事例が以下のように続出する。

(ア) 昭和24〈1949〉年2月2日…「よそのこどもが好きで、スケートしているこどもを見ると、自分もからだを動かしてよろこぶ。」(I、p54)

(イ) 昭和24〈1949〉年2月3日…「夕食の時、父が『アッ。』のようにせきばらいをすると、すぐに『アッ。』

の文のようにまねる。ついで、母の乳房をふくんで、それをはなしながら、父のほうをふりむいて、ひときわたかく、『アーハン。』の文のように言う。二回目のまねを、このような形です。」(I、p55)

(ウ) 昭和24〈1949〉年2月4日…「母がお隣の竹原のケイコちゃん(あかちゃん)が『ブー。』をすると話していたら、すぐまねをして「ブー。」の文のように母に言う。

(エ) 同年同日…『『オツム テンテン』、『イキマシヨ イキマシヨ』(手をいそがしそうにふる)を、気の向いた時にしている。』(I、p56)

(オ) 昭和24〈1949〉年2月5日…「父が『ウーン。』のように言うと、すぐまねて、『ウーン。』の文のように言う。」

(考察)(ア)は、子どものスケートをする動作を見て、自分でも体を動かして喜んだものである。それに対して、(イ)は、父のせきばらいをまねるものの、その後語尾を変化させて加えている。(ウ)は、母の話に出てきた赤ちゃんの発した音をまねて発音している。しっかり誰の発した音が聞き取っている証であろう。(エ)は、幼児向けの歌詞に合わせた動作を気の向いた時にはまねするというのである。(オ)は、聞きなれ、言い慣れたことばでもあるため、すぐにまねることができている。

この延長線上に、時おりまるでことばを交わしているかのようなやり取りの場面が現れる。

(カ) 昭和24〈1949〉年2月7日…「昼寝からさめて、きげんのいい時、母がお乳をのませながら、澄晴の右の人さし指をもって、『オカーチャンノ オハナ。』の文のように言って、母の鼻をなでさせると、うれしそうにわらう。ついで、母が『スミハレチャンノ オハナ。』の文のように言って、澄晴自身の鼻をなでさせると、うれしそうにわらう。」(I、p57-58)

(キ) 昭和24〈1949〉年2月8日…「(夕食後)母が『オカーチャンノ オハナワ ドコ?』の文のように言うと、母の鼻の頭をさす。ついで、母が『スミハレチャンノ オハナ ワ?』の文のようにきくと、自分の鼻の頭をさす。しかし、これは気が向いた時だけする。ついで、父が出てきて、『オトーチャンノ オハナワ ドコ?』の文のように言うと、思いきり父の鼻の頭をつねるようにする。父が『ア イタイ。』の文のように言うと、みんなわらいこける。」(I、p58)

(考察)(カ)は、生後11か月の終わりにもかかわらず、笑うだけで、声を発していない。しかし、二回とも「うれしそうにわらう」ところから見て、母が言っていることも、自分の指をもって示したりすることもわかってしているようである。したがって、これは単に語彙を獲得させる場面なのではなく、二往復のやり取りが成立している場面なのである。そうすると、(キ)も指差し二度とつねる行動一度によって、三往復のやり取りが可能になっていると言えよう。いずれも、その場面で見たこと、聞いたことをしっかり受けとめていればこそ、できた反応なのである。とりわけ(キ)の事例は、満一歳になる前の乳幼児がどれくらいの力を秘めているかを端的に示す場面と言えよう。

④この時期にも、前月に引き続いて口頭練習を以下のように試みている。

(ア) 昭和24〈1949〉年2月5日…「上下両唇をあわせて、ふるわせ、『ブーブルル…。』のように言い、つづけてくりかえし言う。その動かし方は、自由になってきている。」(I、p56)

(イ) 昭和24〈1949〉年2月7日…『『アー アー アー』という単調な平板な言いかたでなくて、『アー アー。』のように、高低をつけて言う。母の背にいるときなど、そのようにしている。』(I、p58)

(考察)記されているのは二度に過ぎない。しかし、書きぶりから見て、その日だけでないことは、推測がつく。(ア)の「ブーブルル…。」は、息の続くまで出されるのであろうし、また、飽きるまで繰り返されるのであろう。両唇音をこのようにどこまでも練習する時期があつて、自在に出せるようになるのである。また、(イ)の『アー アー。』は高い音・低い音を調節するために試しに出しているようで、音域を広げるために不可欠なのであろう。こういうことも、人がいないとき、調子が良い時、折々に行われていたようである。

三 ことばが出始め、発声練習もさかんに行う(生後12か月まで)

①立ち始めているため、行動はまいにちといつてよいほど記録されている。(記録と考察省略。)

②前節までの順序を入れ替えて、聞くこと・見ることから先に取り上げる。この時期には、その重要性や会話への発展性が、一層注目されてくるからである。

(ア) 昭和24〈1949〉年2月9日…「母が『チュンチュン ワ?』の文のようにきくと、お隣の竹原さんの屋根のほうを、窓からふりむく。」(I、p59)

(イ) 同年同日…「母が『ブーブー ワ? スミハレチャン ブーブー ワ?』のように、『ブーブー』(自動車)のことをきくと、窓から、右側の道路のほうをのぞくようにする。」

(ウ) 昭和24〈1949〉年2月10日…「父が出勤する前、洋服を着ようとして、『ウーン。』のように言っ
て背のびをすると、澄晴は自分ですわっているながら、両手をよこに張って、背のび、あくびのまねをする。」
(I、p60)

(エ) 昭和24〈1949〉年2月12日…「昼寝、少ない。お隣の浜本のお婆さん、お隣の竹原のお婆さんがつ
ぎつぎにみえると、手を出して、抱いてくれと言う。」(I、p62)

(オ) 昭和24〈1949〉年2月15日…「父のペンさき入れの箱を見つけ、うちふってあそんでいる間に、ペ
ンさきが出てしまい、その一つを手にもって、口へもっていこうとする。母が『パパ ツー。』の文のよう
に言っても、きかない。『パパツー。』と、母が言うのがおもしろらしく、なんべんでも言わせる。のち、
靴下の中から、ペンさきが一つ出てきて、父・母ともに、あわてる。」(I、p64)

(カ) 昭和24〈1949〉年2月17日…「午前七時前、起きる。まだ寝まきのままでいる時、ねこの声が戸外
からきこえてくると、見ようとして、窓のところまで急いでいく。雨戸をあけてやると、ねこのほうをじっ
と見ている。その間に、母が大急ぎで服を着せる。霜のまっしろにおいた寒い朝なのに、夢中でねこを見つ
めている。」(I、p65)

(キ) 同年同日…「ねこのなく声をまねて、父が『ニャーン。』の文のように言ってみせると、その口元を
じっと見ている。」

(ク) 昭和24〈1949〉年2月18日…「すこしも昼寝をしない。お客さんからもらったおかしをうれしそう
にながめ、つぎに母に向かって手を出す。おいしそうにたべる。」(I、p66)

(ケ) 昭和24〈1949〉年2月19日…「精米所へいく途中、また、精米所の前で、自動車やオート三輪の通
るのを見て、とてもよろこぶ。」(I、p67)

(コ) 昭和24〈1949〉年2月22日…「ねこや雀のなく声がすると、すぐ窓のところはいきたがる。朝早く
でも、夢中になって見ている。」(I、p68)

(サ) 同年同日…「昼食の時、澄晴は、右のほおにほうれんそうを、左のほおにご飯粒をつけておる。母
も左のほおに、ご飯粒をつけている。澄晴がそれを見つけ、母のひざの上にのびあがるようにして、とった。」

(シ) 昭和24〈1949〉年2月23日…「母に抱かれて、お隣の浜本さんのうちのにわとりをじっと見ている時、
母が『コッコサン。』(何回か言ったようである。)の文のように言ってみせると、口をしきりともぐもぐさせ
る。しかし、まだ『コッコ』というのはいえない。」(I、p69)

(ス) 昭和24〈1949〉年2月25日…「午前六時半ころから、起きる。目をさましてからは、きげんよくう
れしそうにあそぶ、雨戸をあけてやると、雨だれを見つめている。」

(セ) 昭和24〈1949〉年2月26日…「午後、母につれられて、父の学校(当時、広島市出汐町にあった)へ、
お使いに行く。途中、自動車を見るたびに、よろこぶ。」(I、p70)

(ソ) 同年同日…「父が口笛を吹いていると、唇をすぼめるまねをする。」(I、p71)

(タ) 昭和24〈1949〉年2月27日…「昨夜は、ぐっすりねむり、午前六時前、起きる。種橋のおじさん(父
の友人)がきて、泊っているので、ふしぎそうに見ている。しだいに慣れて、よくあそぶ。」

(考察) 聞かれたた時には、(ア)・(イ)のように、答えるために振り向いたり、のぞいたりするのが出発点
になる。聞いておもしろいと思えば、(ウ)・(ソ)のように、格好だけあくびのまねをしたり、唇をすぼめる
まねをしたりすることにとどまる。また、聞いてその言い方がおもしろいと感じたら、(オ)のように、自
分が注意されていることは忘れて、そのようなことばを何度もせがむようなこともある。聞いて猫の声や雀
のなく声のように興味の湧くことなら、(カ)・(コ)のように「夢中になって見つめ」ている。しかし、ほ
んとうに自分でも言いたいと思ったら、(キ)のごとく、父が「ニャーン。」といった口元をじっと見て研究
したり、(シ)のように、「コッコサン」と実際に言ってみようとしたりして、「口をしきりともぐもぐさせ」
たりするなど、試みるものなのである。

一方、見ることでは、知っている人が来ると、(エ)のように、手を出して抱いてほしいという思いを表すし、もらったお菓子がほしいと思えば、(ク)のように、うれしそうに眺めて、母に向かってほしいという気持ちを手で伝えている。反対に、(タ)のように、知らない人が泊まっていたばあいは、「ふしぎそうに」ながめ、慣れると遊ぶという過程をたどる。関心の強い自動車やオート三輪が通れば、(ケ)・(セ)のようによろこぶし、見たいものが見つければ、(ス)のように、雨戸をあけてもらおうとすぐに、「雨だれを見つめて」いる。母のほおにご飯粒がついているのを見つけると、(サ)のように、僕が見つけたと言わんばかりに、率先して「ひぎの上のにびあがるようにして、とっ」ている。いずれも、声を発していないが、(セ)は、すぐ後に、「自動車を見ると、『ブーブー。』のように言ったり、ゆびさしたりする」(I, p70)という場面が出てくる。声を出す土壌は、聞くことから、見ることから、整っていると言えよう。

③いよいよ声を出す系列の考察に入る。以下のように、今までと比べてぐんと多くなる。

(ア)昭和24(1949)年2月9日…「母におんぶされている時、母が背中の中の澄晴に向かって、『スミハレチャン?』の文のように言い、自分でこたえて、『アーイ。』の文のように言う。これを母がくりかえしていると、背中で、『アーア。』の文のようにこたえている。まだ『アーイ。』とはならない。」(I, p59)

(イ)昭和24(1949)年2月10日…「ふろにいつている時、よそのあかちゃんが『アーン。』のように泣いているのをきくと、すぐにまねて『アーン。』の文のように言う。」(I, p60)

(ウ)同年同日…「障子の小さい穴に、指をつっこんで、ぱりぱりとやぶる。母が『コレ コレ コレ。』の文のように言って、とめる。すると、ひょっくり母のほうを向いて、その目の色をみる。母がだまってらむと、右手を左右にふって、『ア ア ア。』の文のように言う。怒った言いかたである。それでもだまって見つめてみると、泣きだしてしまう。」

(エ)昭和24(1949)年2月11日…「午後、ふすまのすきまから、父のへやにいる父に向かって、『バー バー。』の文のように言い、頭をさげる。父は、『バー。』の文のように言ってやる。ついで、父のへやにはいつてきて、ひさしぶりに父の本を本棚からひっぱり出して、よろこぶ。父、大いにこまる。」(I, p61)

(オ)昭和24(1949)年2月12日…「午前六・一五ころ、くるりとうつぶしになったと思うと、目をさまし、すぐふとんから出て、おもちゃのところへいく。ついで、父のねているそばへきて、「バー。」の文のように言う。父も、『バー。』の文のように言う。」(I, 61-62)

(カ)同年同日…「(場面を欠く)ときどき、『アーイ』という言いかたになる。[ai]のうち、aははっきり。iはしぜんにあわく。それは人の注意をひくために、呼びかけようとする時などに出る。」(I, p62)

(キ)昭和24(1949)年2月14日…「二時半ころ、父が帰宅すると、よろこんで、父のへやにいつて、さっそく本を本棚から落としてよろこぶ。『エイ エイ。』のように言って、わらっている。」(I, p63)

(ク)昭和24(1949)年2月15日…「昼前、編物をしている母のところへ、はいよってすがりつき、お乳をほしがって、『ウンウン。』の文のように言う。母がとりあわないでそのままにしていると、突然、のびあがって、大きい声で、『オッパイ。』の文のように言う。母もびっくりして、お乳をのませる。『オッパイ』とはっきりと言えたのではない。でも、母にはとにかく『オッパイ』ときこえた。『オッパイ』の『パ』は、『ブ』になったり、『バ』になったりする。意識して、両唇をあわせて、発音しているかのようである。」

(ケ)同年同日…「午後二時過ぎ、魚屋さんがくる。外に出て、魚をあれこれ、母がみながら、『タイタイ。』の文のように言ってやる。くりかえして言ってやる。帰りながら、『タイタイ』をくりかえして、母が言ってやる。へやに帰ってから、あられを見て、澄晴が母に、『タイタイ』の文のように言う。『タ』は、きわめてわかわかしい感じである。」

(コ)同年同日…「夕方、父が帰った時、窓の障子のところに立ちながら、口の中で、『タイ タイ タイ…。』をくりかえし言う。『タ』は、はっきりとはきこえない。『チャ』のようにもきこえる。」(I, p64)

(サ)昭和24(1949)年2月16日…「午後、父出勤のため、洋服を着ていると、股の下へはいつて、頭を出したり、入れたりする。そして、父に向かって、『バー。』のように言う。母、そのことを、『とてもかわいい。』と、日記に記している。」

(シ)同年同日…「(場面を欠く。)たべものを見ると、『タイタイ。』の文のように言う。また、ひとりであそんでいるときでも、口の中で、『タイ タイ タイ…。』の文のように言う。」

(ス) 昭和24〈1949〉年2月17日…「(場面を欠く。)母がゆっくりと、『タータ。』の文のように言うと、『タータ。』の文のように言う。だいたいそのようにきこえる。はっきりとは言えない。ついで、『タイタイ。』の文のように、なんべんでもくりかえして言っている。あまり大きい声ではない。」(I、p65)

(セ) 同年同日…「午後二・三〇ころ。りんご屋さんが路上にきて、『エー リンゴノ ヤスイ ノー。』(複数回)の文のように言う。その声をきくと、今まであそんでいたのに、ふと母のほうを向いて、『ウマ。』(これも二度以上)の文のように言う。母、りんごを買ってやる。大きいりんごを一つもって、はなさない。一つをむいてもらい、三きれをたべる。」

(ソ) 同年同日…「自分でかくれ、いないいいないしては、『オッター。』のように言う。くりかえして言う。」

(タ) 昭和24〈1949〉年2月18日…「朝、母のやいたパンのあついのを、からだをかかめて、『フー フー フー。』のようにふく。けさはじめて、それをする。父がかかみこんで、『フー フー フー。』のようになると、右手を出して、父にしてはいけないと言うように、父を押しつける。ついで、自分でくりかえし、『フー フー フー。』のようにする。」(I、p66)

(チ) 昭和24〈1949〉年2月20日…「朝、窓からのぞいている時、お隣の竹原さんのうちの屋根の上の空に残っている月を見つけて、『ア。ア。』のように言いながら、ゆびでさす。自分で月をさしたのは、はじめてである。」(I、p67)

(ツ) 同年同日…「小さな洗面器を頭にかぶり、『パー。』のように母に言って、よろこぶ。」

(テ) 同年同日…「『オッパイ』をほしがって、『パー。パー。』の文のように母に言う。『パイ パイ』というようにきこえる時もある。」

(ト) 昭和24〈1949〉年2月21日…「昼から、母とお買物に行く途中、通る自動車を見て、『ブーブー。』のように母に言う。自動車を見て、自分でこのように言ったのは、はじめてである。」(I、p68) (『ブーブー』の使用は、2月24日・25日・26日にも出てくる。)

(ナ) 昭和24〈1949〉年2月26日…「父が自分の足をたたいて、『テン。』の文のように言ってみせると、すぐまねて、『テン。』の文のように言う。また、『テン』は、『デン』となることもある。」(I、p70)

(ニ) 同年同日…「母が『アリガト。』の文のように言って、頭を下げて見せると、『ト。』の文のように言って、頭を下げるようにする。」

(ヌ) 昭和24〈1949〉年2月27日…「父が頭を下げながら、『アリガト。』(ガは鼻濁音)の文のように言ってみせると、『ト。』の文のように、頭を下げながら言う。後の文の『ト』は、[ta]にちかいが、だいたい『ト』[to]になっている。」(I、p71)

(ネ) 昭和24〈1949〉年3月1日…「(場面を欠く。)『トーチャン。』と、父を呼ぶ。まだ、はっきりとは言えない。あいまいではあるが、そう言おうとしている。朝(1)、夜(2)、二回言う。」(I、p71-72)

(ノ) 同年同日…「父が『スミハレチャン。』の文のように言うと、こたえて、『アーア。』の文のようになる。まだ、『アーイ』と言えないで、『アーア』となる。」(I、p72)

(ハ) 同年同日…「(場面を欠く。)母を呼ぶとき、『アーチャン。』のように言う。まだあいまいである。」

(ヒ) 昭和24〈1949〉年3月2日…「昨日、平井の祖母に買ってもらった『バタバタ』を押してあそぶ。押すにしたがって、『ブーブー。』のように言う。『ブーブー』の言い方は、平易でなだらかである。動作にともなわせて、『ブーブー』と言っている。自動車のつもりなのである。」(I、p72)

(フ) 昭和24〈1949〉年3月8日…「うどんをさますのに、『ハー。』のように息を吸いこみ、ついで、『プー。』のように、唇をあわせて言う。はっきりと呼吸をする。」(I、p73)

(考察) (ア) は、母がわが子に話しかけるにとどまらず、返事までしてみせることを繰り返すと、きちんとは答えられないが、「アーア。」とは言えるようになったという事例である。ただし、このばあいも、母の背中において、母の口元をじっと見ることができなかつたため、アからイにどう唇を動かせばよいか、わからないままになっているのかもしれない。(カ) は、それでもこの言い方が、時にはきちんと「アーイ。」と言えることもあるとしている。ただし、「人の注意をひくために」自らが「呼びかけようとする時など」に限られるというのである。(ノ) で、実際に父が名前を呼んでも、依然「アーア。」としか言えていない。

(イ) のように、赤ちゃんの泣き声をまねることは、前月にも似た場面があり、しっかりできる。(ナ) の

ような短くおもしろそうなことばをまねるのはたやすいことであろう。(ウ)のように障子を破るのを止められる場面では、手を左右に振るばかりか声を出す、局面を開くことができず、泣きだしている。(チ)は指差しと声とがうまくかみあったとき、語は作り出せなくても、思いを伝えられている。(エ)・(オ)・(サ)・(ツ)は、自ら話しかけるちょっとしたあいさつことばとして「バー。」が言えるようになり、自信をもって使うようになっていく。(キ)は、喜びの表現として「エイ エイ。」が自然に出ている。(ク)では、母にお乳がほしいことをわかってもらおうとして、大きな声で「オッパイ。」と言おうとした例である。「オッブイ」になったり、「オッパイ」になったりしても、ともかく両唇を合わせて、意識して発音しているようだとしている。ただし、「オッパイ」は特別の時に言えただけのもので、(テ)では、「パー パー」、もしくは「パイパイ」というにとどまっている。(ケ)において、母が魚のことを「タイタイ」と繰り返して言ってやると、へやに戻ってから、魚のあられを見て、「タイタイ」と言い出している。(コ)・(シ)・(ス)では、それが発音練習の一部になり、食べ物に一般化される様子が描かれている。もともと、(ス)の前半に記された「タータ」は靴下のことのように、それを母に教わった後も、発音の近い「タイタイ」の練習をしていたとすると、母の繰り返した発音がよほど幼児の頭に刻まれていたのであろう。

(セ)は、りんご売りの声に母の方を向いて「ウマ。」と言ったというのであるから、ここでもほしい気持ちが一語文を作り出したと言えよう。(ソ)のひとりで隠れ、見つけ出して「オッター。」というのは、初めての述語の使用でもあり、どこで覚えたのか、驚かされる。遊びが幼児にとってどれほど大切なものを改めて思い知らされる。(タ)のパンの熱いのを「フー フー フー。」と吹くのは、幼児自身には言葉を発している意識はないのかもしれない。しかし、一番自然に擬声語を獲得しているのであろう。(フ)も、よく似た例である。自動車の音を喜ぶのは前月でも出てきたが、(ト)は音を擬声語で言えるようになり、(ヒ)は、自分の「バタバタ」を自動車に見立てて音を出すに至っている。(ニ)・(ヌ)は、母と父から頭を下げることと同時に少し長いことばを言うことを促される。しかし、当然覚えられず、最後に耳に残る一音を言うにとどまる。(ネ)と(ハ)は、父を「トーチャン」、母を「アーチャン」と言えるようになっていく。まだあいまいだとしているが、曲がりなりにも10語近く言えるようになったのが成長なのである。

④口形練習・発音練習も、次のようにさかんになってくる。

(ア) 昭和24〈1949〉年2月9日…「音を習いおぼえようとする時は、口形を、じっと見ている。親の模範が大切となってくる。」(I、p59)

(イ) 同年同日…『『バ。』は、このごろ、大きくつよく出る。『バー』となる。『アバ。』も、つよくなってきた。『アン。』『マ。』なども、出ている。」

(ウ) 昭和24〈1949〉年2月14日…「舌をこまかくうごかして、『ロイ ロイ ロイ…。』のようにつづけて言ったりする。」(I、p63)

(エ) 昭和24〈1949〉年2月15日…「まだ、はっきりと『ネ』が言えるのではないが、『ネン ネン ネン…。』のようにつづけて、ひとりで言う。」(I、p63-64)

(オ) 昭和24〈1949〉年2月18日…「唇を二つあわせ、ぶるぶるとふるわせてあそぶ。また、口の中で、かすかにひとりなにかささやくように言う。」(I、p67)

(カ) 昭和24〈1949〉年2月26日…「○ダイ ダイ ダイ…。(→己)

今までは『タイ タイ タイ』と言っていたのが、このように、『ダ』になってくることもある。[da]の音が、はっきりと出てくる。」(I、p70)

(キ) 同年同日…「○ヤイ。(→己)

また、[jai]のくりかえしも出てきている。」

(ク) 昭和24〈1949〉年3月1日…「○パ。(→己)

『パ』の音は、はっきりと発音している。」(I、p72) (他にも、『アップ。』『チ。』などの発音も挙がっている。『プチャプチャ』という舌つづみ、『アツ ムニヤムニヤ。』という寝言にも触れている。)

(考察) (ア)は、話しことばの土台となる音の獲得に口形を見せることがいかに重要であるかを幼児のまなざしから確認するものである。(イ)はこの時期の初めにどんな音が出されているか、略述している。(ウ)の「ロイ ロイ ロイ…。」(エ)の「ネン ネン ネン…。」(カ)に触れている「タイ タイ」や「ダイ

ダイ ダイ…。」(キ)の「ヤイ。」などが、発音練習として実際にひとりで連続して出しているものである。(オ)この時期の発音練習の中心が両唇音を発することにあり、それをどんなふうに行っているかを描写している。こうした努力はなかなか目にはしにくいだが、日本で生きていこうとすれば、日本語に合うように努めるほかないものである。それをすべての乳幼児が人が見ていようが見ていまいが気にせずに練習している事実を念頭に置くと、言語教育実践者として頭の下がる思いがするのである。

おわりに

幼児教育に携わる人にとって、この0歳10か月から12か月までの発達で指標にすべきことは、以下の三点になろう。

- 1、身体的には、ようやく立ち始め、何歩か歩き出す時期になってくる。それだけに十か月目は一語文がでてくるための準備期に当たり、十一か月目は実際に一語文が現れ、指差し行動が言葉と同じくらい有用な行動だとわかり、次々に出てくる。また、見聞きして、動作をまねたり、発音をまねたりする行動も、さかんになる。口形練習・発音練習も七か月目以降、地道に行われている。十二か月目に、次々に新たな一語文が登場し、0歳児の頂点として花が開き始めた感がある。ことばを話す人間としての第一歩が二足歩行と連動していることも、深くつながっていることが了解されてくる。
- 2、九か月目から出始めた遊びが目を追い、月を追って盛んになり、ひとり遊びも周りの人を巻き込んだ遊びも、並行するように活発さを増してくる。他方、見ること・聞くことも、まねることが多くなるため、声を発する土台を一層耕すのに役立つ。体を動かすことの中心が子どもにとっては遊びとして現れるのであり、ことばを発する必要と欲求を生み出す本道となるのである。他方、見ること・聞くことは、次の行動・遊びを生み出す契機になるのであろう。それがすぐに行動・遊びにつながることもあり、一旦そこで終わることもある。しかし、内に蓄えられて、以後芽を吹く根になるかもしれないのである。
- 3、口形練習・発声練習は本来幼児が人のいないとき、自分で試みるものであろうが、一語文と重なる場合も出てくる。それにしても、話す場に臨む前に、乳幼児が誰にも教えられないのにこのような口形練習・発声練習を自主的・主体的に行っているのは、驚きである。この時期の幼児は、他のどの時期よりも熱心な母語学習者なのである。幼児期に携わる人はこの事実を厳粛に受けとめて、どのように促していくべきか研究する必要がある。直接的な関わり方は困難であろうが、それでも何かできないか、探し続ける必要はあろう。もちろん、多くの幼児教育実践者が取り組み、見通しをつけていることであろう。私自身もそういう事例を探し出して、学生諸君にも提供し、また検証できるように努めていかなければならない。

**The development and the aim of language life of 0 years old period for
the people who are engaged in preschool education based on
“The realities of an infant life” I (NODHI Junya) –**

Shinsho MAEDA

Advanced course of child care and education at Kyusyu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

The purpose of this study is to explain the development and the aim of language life of 0 years old period for the people who are engaged in preschool education. on that occasion, I find on “The realities of the infant language life” I (NODHI Junya) .

I took it up for the scene where the words of one infant from 0 years,10 months old To 12 months. and I clarified relations of the holophrase with playing, looking, hearing.